
レンジファインダー・ハーツ

消炭灰介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レンジファインダー・ハーツ

【Nコード】

N4160M

【作者名】

消炭灰介

【あらすじ】

距離感をテーマに描く青春以上恋愛未満なワンシーンのオムニバス（の予定）

ひとつひとつが独立した話なので、どこから読んでも、ひとつだけ読んでもさしつかえなく、続きも気にならないのでご安心を。

01 ウタタネ

「べつくし！」

そのあまりにも男前なくしゃみに、耐え切れず笑いがふき出す。やわらかな光とやさしい風が立ち込める二人だけの教室に俺の声だけが響く。

その声が耳障りだったのか、はたまた自分のくしゃみに驚いたのかは解^{わか}らないが、くしゃみの発生源の少女はむくりとつぶつぶしていた机から身体を起こす。

「おはようさん」

声を掛けても未だ半ば夢の中といった少女はねむけまなこをこすりつつ現実へ戻るため首をぐるりと回し教室内を見渡す。

黒板に書かれた落書きから開け放たれた掃除ロッカーへと視線は旅行し、最後は椅子に反対向きに腰掛ける俺に帰ってきた。

「なに？ そのにやけ顔」

毒のある言い方は決して眠いからではないだろう。だから、

「おまえの寝顔があまりにもかわいくて」

とはぐらかす。もちろん顔は見れない。

それに、本当のことを言った場合、こいつの場合は問答無用で拳が飛んでくる。

「あっそ」

昔はもう少し素直な反応を見せたものだが、まことにはや。

「みんなは？」

「帰ったよ、何時だと思ってる。授業はとっくに終わってるよ」

寝起きで視界が安定しないのだろう少女は目を細めてしかめて凝らして黒板の上に設置された掛け時計を見る。

「……4時10分……」

よく読めました。

時間を確認できたことに満足したのか、再び机に突っ伏そうとす

る少女の横顔を見て、

「ほら、ヨダレふいて」

俺はハンカチを差し出す。

少女はそれを受け取ると無頓着な手つきで口元の唾液をふきとり、一度開いて裏側に二つ折りしたハンカチを鼻に当てると盛大に鼻水をかむ。

「鼻水はティッシュで処理しなさい」

いや、なんかね。

「花粉症だからしかたないでしょ」

「それ理屈にすらなっていないから」

聞く耳もたず。

唐突に少女は顎をあげると、痙攣のように2回ひくつく、それが一種の溜めだと気づいた頃には、

「べつくし！」

先ほどの男前さんが光臨していた。

予備動作である程度解っていたのでどうにか大笑い避けられた。

喉の奥で笑いを殺そうとしたところ蛙がつぶれた音ならぬ蛙をつぶす音的なものが鳴ってしまったが。

しかし、少女は気にしたふうもなくハンカチで鼻ぐじぐじいじると首を下げ「ううー」と唸る。くしゃみに対するあたらしいタイプのリアクションだ。仮にここで少女が「ちくしょー」とか言っても軽く引くが。

「帰るか」

とりあえず、動く気ゼロの少女に行動を促す。

「う。つく」

喉の奥から捻り出された奇音。

「なに？ いまの」

「しゃ……ひつく……くり」

その返答はしゃっくりを挟みながら。

「忙しいやつだな」

くしゃみにしゃっくりに。

「暗い、電気」

点けるってか。

「もう帰るから」

さっきのしゃっくりは肯定だったような気がしたのだが。

少女は視線を落とし、逡巡するそぶりを見せると俺に向き直り無言でハンカチを差し出す。

「洗ってかえそうよ」

鼻水かんだんだし、せめてちゃんと四つ折にするとかさ。

少し落胆した表情で少女はハンカチを制服のポケットにしまうと、机の上で腕を組み、そこに頬をのせる。

「もうちょっとここに」

そこまで言って少女はあくびをひとつ。続いてしゃっくりをひとつ。

未だ湿り気を帯びた瞳はどこまでも深く、狂いそうなほど扇情的で、同時に俺の中に暗い感情を植えつける。状況確認といってもいい少女への質問が喉まででかかったが、俺はどうにかそれを飲み下す。

そんな少女の瞳が不服げに俺のほうへと向く。

「学校は仮眠室を設置するべきだと思う」

そうですか。

「生徒会にでも頼んだら？」

「あんたばか？ そんな意見、通るわけないじゃない」

左様ですか。

ひつく、ともう一度しゃっくり。そこで二人は言葉を失う。

誰もいない教室の風は乾いていて、子どものように薄暗い教室へと迷い込む。カーテンを揺らし、少女の髪をさらい、窓際に座る俺たちの許に桜の花びらをとどける。空気がこすれる音はどこか泣いているようでも悲しい。流れる雲に一時身を潜めていた太陽が姿を見せるも、天空に栄えた頃の粗暴さはなく、今はただやさしく二

人の影を伸ばす。

俺はこの風景を知っている。しかし、俺が今いるここには俺はいなかった。ここには他の男がいた。今日はいない。

ひっく

と、少女のしゃっくりが響く。まぬけな響きだ。そのまぬけさからか、俺は先ほど飲み込んだ言葉を吐き出してしまった。なんとなく、その能天気な雰囲気には許される気がした。

「おまえ、彼氏は？」 どうした？

言ってから後悔する。そんな間を与えず、

「別れた」

即答。ふられた。ではなく。

「ふーん」

俺は逃げるように二人が長い影を落とす教室へと視線を泳がす。

一瞬見えたその憂いを帯びた表情は長い付き合いの中で知っている。だけど、それにかける言葉を俺は知らない。

「ふーん、かよ」

だから、毒に見せかけたその言葉は彼女の優しさだ。

響きは甘く、語気は鋭く、だけどその心はちゃんと俺に届く。だから、他者が入る隙間のないその瞳は、ああ、まだこいつは夢の中にいるんだな。と俺を妙に納得させた。

「さ、帰ろ」

少女はすい、と立ち上がり足元の俺の鞆を拾って手渡す。俺は自分の鞆を肩に担ぐ少女を尻目に先に出口へ向かう。扉を開いたところで背後から声がかかった。

「あ、」

返事はしない。視線だけで後ろを向き、次に紡がれるであろう言葉を促す。

「しゃっくり止まったかも」

「おお、そりゃよかった」

素直に出たその言葉はなかなかに棒読み成分が多めだった。

少女が出るのを待ってから、静かに扉を閉める。
黄昏前たそがれの日差し、やわらかな光が二人を包む。
「べっくしー！」

二人きりの廊下には俺の笑い声がよく響いた。

01 ウタタネ（後書き）

作中で『少女』が出てきますが、これは『俺』と面識がないのではなく、そうゆう仕様です。別に名前をいちいち考えるのがめんどろだったわけではありません。……すいません半分嘘です。

このレンジファインダー・ハーツは青春と距離感というシリーズで一貫したテーマとは別に各章で1個か2個テーマを用意して書いています。今回記念すべき第一章のテーマはズバリ『幼なじみ』です。どうでしょうか、幼なじみのなんともいえない距離感と青春独特の寂寥感を演出できていたでしょうか。

技術的にはまだまだですが、これから日々精進してゆきたいと思えますので、生暖かい目で見守っていただけると幸いです。

最後に、

読んでくださってありがとうございます。

何か気づいたことやアドバイス、疑問、質問、誹謗、中傷などがございましたら感想のほうにどんどん送ってください。うれしくて小躍りします。

02 エガオ

含んだ瞬間、バニラの香りが広がる。ひやりとした感触は一瞬、至福をもたらすと溶けて消えた。その満たされない感覚が手に持った木べらを何度も机の上の杯と口とを往復させ断続的な幸福を与え続ける。

昼下がり、換気のためにクーラーの電源を落とし、開かれた窓からがんに熱気が流れ込む教室は人もまばら。うるさいといえば余生の最後を華々しく散らそうと奮い立つセミくらいで、それ以外では比較的静かな昼休みの時間が流れていた。

俺は午後の授業に備えて、購買で缶コーヒーとアイスを買い、ひたすらストレス値の減耗にいそむという至福の時を過ごしていた。うだる暑さに辟易しつつ、アイスを食べる。そのこの上ない喜びを唐突に聞きなれた声が打ち破った。

「聞いてください、私好きな人ができました」

あいさつ代わりに片を叩かれる。声の主はそのまま回り込んで前の空^あいてる椅子へと腰掛ける。机をはさんで向き合う形となった。

「またですか先輩」

という言葉はこないだも口にした気がする。無遠慮なあいさつに對する返事も兼ねて、

「今度は誰です？」

と外交修辞的な、質問になっっていない質問を投げかけておく。

「こないだも話したB組の」

その話は聞いている。が、なんとなく、名前まで出されるのが不愉快だったので、

「あーあのこないだの人……」

と先輩の言葉を遮る。

「そうなんです、やっぱり運命なんですかね」

会話が成立していない。しかも唐突に運命とか言い出した。しか

し、たぶん、言葉を発するまでに、この人の頭の中では運命に繋がる経験が回顧されたのだろうと解る。だからといってその運命性がこちらに伝わるわけもないのだが。

俺は意識的にわざとらしくない小さな溜息をついてみせる。

「じゃ、今回も『負け』に缶ジュース5本で」

言いながらアイスを一口運ぶ。幸せは口いっぱいに広がってまた消える。

「増えてる？」

このないだは3本だった。

「ああ、そうですねこれじゃ賭けになりませんよね」

いちいちリアクションするのもめんどくさいので話の先を予想して答える。先に会話をすつ飛ばしたのは先輩だ。

「たしかに6戦6敗ですけど……」

先輩は言いよどんで、思案するように斜め上へと視線を滑らす。

「こんどこそいけるはずです」

その自信の根拠はなんだ？ と正面きつて否定するのは可能だが、あまりにも酷なので事前に手に入れていた情報で牽制を試みる。

「あの人、巨乳好きらしいです」

「なっ」

どうやら俺の言葉は見えないボディープローになったらしく先輩は身体をくの字に折る。

一撃で相当グロッキーな先輩はふらふらと体勢を起こす。両手の平を脇に当てると体の中央へぐいと押し寄せ始めた。

「いや、よせてあげても先輩ではその域に達するのは不可能です」

もう一発入ったらしい。こんどはジャブといったところか。

「じゃ、じゃあ」

何となく言わんとしていることはわかる。だから、

「偽装しても最終段階ではれるんじゃ意味無いんじゃないですか？」と調子づく前に出鼻をくじく。

「じよ、徐々に減らしていけば……」

「なんだそのエセ禁煙法みたいな考え」

「彼の邪念を取り払うのは私です」

意味がわからん。

「払う側に邪念たつぷりすぎますね」

「うるさいです。私の魅力をもつてすれば執行猶予があればなんと
かできます」

「どこに魅力が詰まってるんだか」

いけね、つい胸を見ながら言ってしまった。

「名誉毀損で訴えます」

「とりあえずこれで示談にしてください」

俺は先ほどアイスと一緒に買ったまだ空けていない缶コーヒーを
差し出す。

「よろしい」

受け取った先輩はさっそくプルタブに指をかける。

構わずにアイスとストレスを減らす作業に取り掛かると、かちか
ち、という数回の金属音の後、缶コーヒーは俺の許へもどってきた。

「あかない」

「はいはい」

飲み口を開けて再び缶を渡す。

先輩は何故か立ち上がり、それをぐびぐびと勢いよく飲み干す。

最後に、ぷはと息をつき再び席についた。そして、ごっん、と机に
額をつけ力なく、

「なんで、いつもだめなんでしょうね」

とさっきのは自棄飲みのつもりだったらしい先輩がコンパクトに
落ち込む。

俺には原因が解っている。でも、俺の心のどこかがそれを認める
のを拒否する。それを認めることは俺の想いが許さなかった。口に
出してしまうと認めてしまいそうで言えない。だから思慕と嫉妬と
同情が縋り交ぜとなった心は毒となって口を出た。

「どうせ本人を前にしたらなにも言えないくせに……」

それがなかったら。そう思うのは俺の欲目ではないはずだ。

「それに……」

口がすべった。正確にはわざとすべらしたのかもしれない。

先輩の問い質す視線から逃げるため、アイスを口に入れた後も役目を果たした木べらかじかじ、と噛む。

噛みながらも頭のなかでは、直接真実を知るよりも俺という緩衝材を挟んだほうが先輩にとっても損傷が少ないはずだ。など、あくまで打算的なことが廻る。

なんて最低なんだ俺。

「実は……」

頭を起こした先輩の視線からはもう逃げられない。そのまま言葉を続ける。

「彼女いるらしいですよ」

ごつん、と盛大な音を鳴らして先輩は机に額をつける。あまりにも音が大きかったので教室の後ろのほうに残っていた人々が一瞬こちらをむいたが、音の原因を察すると満足したようで、すぐに談笑に戻る。

視線を先輩を戻すと両耳に手が添えられていた。

聞かなかったことにする。という腹づもりだろう。

俺もここまできたら引き返せない、彼女に決意を促さなければ。

「……もう一回言いましょうか？」

ふるふると首が振られる。机との設置面の効果音はごりごり、だ。

「こうなったら彼を口^{くち}ろして私も死にます」

なかなか物騒なことを呟^{つぶや}かれる。

「なに、言ってるんですか」

「あ、そうか彼女を口^{くち}ろして私がくっつけばいいんですね」

ばっ、と身体を勢いよく起こす先輩はとてにこやかなしたり顔。「何その『あ、いま私すごくいいこと言った』みたいな笑顔！俺には人としてどうかと考えさせられる言葉が聞こえましたけど！」

道を誤らせないため一応つつこむと、ごつん、と今までで一番大

きな音を鳴らせて、

「ふーん、そっかー」

あきらかにふてくされた。

額と机にはさまれた髪をじやりじやりと鳴らしながら首を回しこちらを向く。

もの思わしげな表情。伏した目にかかるけぶるような睫、机上に散乱した髪。そのどれに俺の心臓が反応したかはわからない。頭に血が上る。気づいたときには言葉を吐いていた。

「ま、絶対無理って決まったわけじゃないですよ」

「励ましてくれてます？」

空の木べらを口に運んだことが照れ隠しでなかったと心から祈る。

「やさしいんだ」

「べつに、可能性で言えば限りなくゼロだと思いますけどね」

「ふふー」

意味不明な笑い。^{わら}意地悪な笑み。^えなんにせよ少しは元気がでたようだ。

「そういうこと言う悪い子にはこれです」

その次の動きはなんとなく予測できた。やにわに体をおこすと口を大きく開き迫ってくる。狙いは俺の手に持つ木べら　もといその上のアイス。しかし俺がとっさに手を引くと「あ」といううめき声と共に開かれた口は空気だけを封入して閉じられる。引き結ばれた口はそのままへの字に曲がる。

「けち」

缶コーヒーを奢ったはずだが。

「あーん」

くわせろ、ということだろう。先輩は大きく口を開ける。今度は自分から迫ってきたりはしない。

真っ赤な下のざらついた質感。粘性でもって一枚膜が張られたような口の中はいやに官能的で俺の気はどうにかなりそうになる。

その口を閉ざすため俺は白い幸せを掬って先輩の口へとぞんざい

に運ぶ。

くそ、こんなことならさっきのうちに食べさしておけばよかった。
絶対後ろの連中が見てる。

「おいしいですか」

「ん」

それはなによりです。

木べらを引き抜こうとするとするが、奥歯でがっちりかんでやるのか、なかなか抜けない。無理に引っこ抜こうとすると顔もついてきた。

「離してください」

自制を促すとしぶしぶといった感じにねっとり口を離す。

そして、悠然と頬杖をつく、溜息をひとつ。

「どこかにいい男はいないものですかね」

その台詞は俺を見て、何故かにやけ顔で。対する俺は、
「そうですね」

と、ぶっきらぼうに返す。

木べらに目を落とす。さっき俺がかじったものとは違う、あきらかに骨格の小さい歯形がくつきりと残っている。ちらりと上目で対面を見れば、先輩の意地悪そうな笑み。

ためらうのも癪しゃなのでそのままアイスアイスクリームを掬すくってはお張る。

バニラの香りは、一瞬で溶けて消えた。

02 エガオ（後書き）

作中での語は一章と同じ『俺』ですがこの二人は別の人です。まぎらわしくてすいません。

どうも、一章二章連続投稿です。

今回のテーマは『年上』　そうですね一章に引き続きまたベタです。恋多き先輩とエスっ気のある年下男のワンシーンです。

一章がもの言わぬ想いっばくなってしまったので二章では打てば響く会話を意識してこの二名をキャスティングしました。

あと貧乳ネタ。どうしてもやってみたかったのでやってしまいました。後悔はありません。けど少し反省してます。

最後に、

読んでくださってありがとうございます。

何か気づいたことやアドバイス、疑問、質問、などがございましたら感想のほうにどんどん送ってください。うれしすぎてブレイクダンスを踊ります。

03 カケアシ

木の葉を揺らす秋風は火照^{ほて}った身体に冷たく気持ちいい。

一般生徒の下校時刻を終えた学校の外周にはほとんど人はいなくて、降り積もった紅葉^{こうよう}に足をとられないように気をつけていれば最適とは言わずとも快適なランニングコースだ。

だが、三周目ともなると、さすがに景色に見飽きてきたし、そろそろわき腹が痛い。だいたい毎日走ってるはずなのにここのところ毎回一周目で紅葉を見ると『わあ、きれー』とか思ってしまうわたし自身が少し悲しい。

そのせいで浮かれたわたしは一周目二週目をはりきり過ぎて、周回遅れのトップランナー爆走(？)状態だ。

これはだまされやすい、ということなのか？ 世界に。

だとしたら……なんだこのやろうやんのかケンカ売ってんのか世界このやろう。と、わたしの地面(世界)を蹴る力が増えてタイムが上がってレギュラー入り間違いなしなのだが。そうもいかないのが現実らしい。

正門前の通りを抜け、学校と郵便局の間の角を曲がる。するとすぐ目に入るのは大楓^{かえで}。

太く、滑らかな幹は、まっすぐ空に向かうことなくまるでこの木の紆余曲折な人生ならぬ木生を示すかのごとく曲がりくねっていて、そこから伸びたあまたの枝はその想いを表すがごとく、ただ一点、敷地の外に向かって伸びている。燃えるような紅い葉とまだ青い葉の濃淡は精彩とか風情とかいう難しい言葉がしっくりくる。

そういうわたしには難しい美しさ 違う。完全に理解の範疇を超えた美しさについていけず、わたしは、いつも、ただただ圧倒される。

さっきわたしは嘘をついた。やっぱり何回見てもこの木は綺麗だ。それは絶対だ。

秋はそんなに好きじゃなかったのに、でもこの学校にきてから、この楓のおかげで好きになったかもしれない。

その校舎裏に住まう敷地から大きくはみ出していていい近所迷じゃなかった。みんなの心のよりどころになっていく楓を見上げつつ真下を走り去る。下への注意をおこたったから危うく積もった落ち葉に足をとられそうになった。

次の角を曲がると、さっきひっかかたのだろう片にかかった紅葉の葉をつまむ。なんとなく元気を貰った気がしてさっきより足に力が入る。

葉を手の中でもてあそびつつまた次の角を曲がる。校門の前を通り過ぎればあと一周だ。わたしはスパートと呼べるかどうかあやしいものの一応速度を上げた。

顎を引き、意識を前に集中させる。

呼吸に一定のリズムを持たせ、肺に多くの酸素を取り込む。

瞬間　息が、止まりそうになった。

彼が、いた。

校門の横、塀に背をあずけてわたしと同じように紅葉の葉を手でもてあそんでいる。

友達でも待っているのだろうか、でもこんな時間に？　こっちはまだ気づいていないみたいだけど。どうしよう。話しかけたい。でも、無理。こっちにも心の準備というものが……。

わたしの心臓が秒を追うごとにその勢いと速さを増す。呼吸がづらい。走ってるからだ。いや、これは違う。これは

短く、強く何回も息を吐く。

これはふりだ。

わたしはもう前しか見ない。

彼のことは視界に入らない。

そうだ、絶対に入らない。

更に速度を上げる。できるだけ彼のことを考えないようにして。わたしは彼の前を横切る。

横切　なぜそれが分かった？

今、完全に意識の外に出すように心がけていたはずだ。
なぜ？

わたしの目が勝手に彼を追っていた？

というか、いま一瞬、目が合ってたか？

ということはわたし無視……した？　無視された？

それ以前に気づかないふりして走り去ること自体がまずかったんじゃないか？　無理だったんじゃないか？

嫌われた？！

向こうはわたしのことなんか眼中にない……か。

涙がこぼれそうになるとかはないけど代わりに大きな溜息をこぼす。

スピードを緩めて角を曲がる。

そこには一周前と変わらぬ姿の大楓^{かえで}。

いや、そんなことはないだろう。散りゆく紅葉^{もみぢ}は刻一刻と姿を
変える紅葉^{もみぢ}の証明だ。

それにしても、なぜこの楓は敷地の外へ外へと出るように枝を伸ばしているのだろう。

外へ外へと腕を、その人の手に似た葉を伸ばして、けれど決して届かず今年も紅く染まった想いを散らす。

そんな一生なのだろうか……わたしも。

そんなの、いやだ。な。

この楓みたいに美しくないけど、けど、わたしだってこの手に掴みたいものがある。

この楓のように幾多の手は持っていないけど、わたしにはこの両手がある。自分で歩ける足がある。想いを伝える口がある。

それを使わないなんて大楓に怒られてしまう。

それとも抜け駆けしたら嫉妬を買うだろうか。

どちらにせよわたしに止まっていることなど許されない。

走り続けることだけがわたしに唯一できることだから。

楓を背にして角を曲がる。

五周目としてはいままでにない速度で残り二つの角も曲がる。

いた！

クラスの男友達と合流して帰るところのようだ。

また、一段と鼓動が強くなる。

チャンス
機会は一瞬。すれ違うとき。

胸が痛い。呼吸を整える時間がほしい。足が勝手に前に進む。

なにか、なにか言わなくては。

だけど、頭が働かない。肺から空気がなくなっただけに喉を震わすことができない。

目が合う。彼も完全にわたしのことを認識した。

もう逃げられない。

でも……声がでない。

せつかく決意したのに、わたしはやっぱりだめだめだ。

行動を先に起こしたのは彼のほうだった。

彼は手を挙げると、

「じゃあな」

すこしはにかんでそんなことを言う。

「うん」

うつむいてまま、そう返すのがやっと。

走る速度を上げて大紅葉の待つ曲がり角へと逃げ込む。

木の葉を揺らす秋風は火照った身体に冷たく気持ちいい。そしていまはすごくむずがゆい。

「ぐぎゃ」

大楓からの嫉妬だろうか、積もった紅葉に足を滑らせた。

そして、我ながらなんとかわいくない悲鳴。

幸せなことに今日のランニングは一周多く走ることになってしまった。

03 カケアシ（後書き）

やっちまった……か？

どうも、消炭灰介です。

今回のテーマは『スポーツ』だったんですが、何だこの植物小説。つ、つまらねー

でも、一回くらいはこういうモノログ調を書いてみたかったので満足です。そしていろいろと（自分の実力を思い知らされたという点で）勉強になりました。

個人的に楓にはすごく女性的なものを感じます。なんか色っぽいんですね。

というわけで『03 カケアシ』一人で走っているとんだか色々考えちゃいますよね？ っってお話です。

P.S.

01、02の誤字脱字と若干の本文（結構前に）修正しました。読みにくくてすいません。これで修正前よりはストレスなく読める小説になったと思います。

04 テブクロ

しんしん。

と、雪が積もる音が聞こえる。

でもそれは錯覚で、雪は音なんか立てないことを私は知っている。しんしん。というのも深深とか沈沈と書いてひっそりと静まりかえった様子をあらわす言葉だということも知っている。最近知ったしんしん。今にぴったりの言葉だ。私たちはしんしんとした閑静な住宅街の中を歩き続ける。

けれど、雪の上に残る足跡は一人分。

私は彼の背中で、彼の背中からは熱は伝わらない。かわりにくつついた背中から鼓動が聞こえる。それが私の鼓動と重なって今の気持ちの背中をぐいぐいと押す。

「重くない？」

私の言葉に、彼は雲のかかった夜空を見上げ、それから喉の奥でくつつと笑ってこう言った。

「重いつて言ったらどうすんの？」

彼のそういうところが嫌いだ。

いつも人を小馬鹿にしたように質問を質問で返す。

だから、仕返しの意味も込めて首に回した腕に力を込める。

「うれじいよ、抱きづいでぐれで」

「ちがうし」

報復失敗。やっぱりこいつはなににもわかっていない。

彼の肩にかかった雪を掃いつつ腕の力を緩めた。

深い吐息は白く長く、私の前にもやをかける。

いじわるで欲張りな雲は星の明かり逃すまいと必死に光をさえぎる。

そして下界にむかって笑った。どうだ、悔しいだろ。って
だけど、そのおかげで、人々はともしびというものを手に入れた。

ぼつ、ぼつと駅周りの街中に比べてもうしわけ程度に据えられた街灯がくれる光は彼が歩くたびに降ったり止んだりで、そのつど私は目をしかめる。

あまりにも眩しいので私は彼の頭の影に隠した。

このまま、目の前の首筋に口づけしたら彼はどんな反応するだろうか。いや、やめておけ私。きつとまた大火傷するだけだから。

「鼻息くすぐつたいんだけど」

その指摘にあわてて顔をあげる。彼の後頭部の先では白いもやが上へと伸びていた。

「そ、そんなに鼻息荒くないし」

乙女に向かって鼻息とは失礼な。

「じゃあ、程よく気持ちよくて興奮する」

「変態」

彼は言葉の代わりに喉の奥で笑ってごまかす。

あたまに積もった雪も掃ってやるが手の長さの関係で掃えないところがある。

「ちよつとこつち向いて」

「え？」

「いいから」

「振り向かないと、また首絞めるよ」

言つと振り向きかけた首が再び前を向いた。

「あ、いま振り向きかけた」

言わなくてもいいことを言う私は意地悪だろうか。

「まあね」

彼も彼で、ここで口を尖らせて反論を言えばかわいいものを、喉の奥で笑って私の言葉をするりと躲す。

後ろからは彼の顔を見ることはできないが見えなくてもわかる。

そこには意地悪な笑いを浮かべている。

「あのさ」

「ん？」

「ありがとう」

「ん」

見なくてもわかるきつとそこには私の好きなはにかんだような笑顔。

私を支える彼の手には私がさつきあげた手袋、そのせいで彼のぬくもりは私には伝わらない。熱は伝わらないが彼の心臓の音は伝わる。私の鼓動も彼に伝わっているのだろうか。

目の前には立ち上る二本の白いかすみ。ふりかえれば、雪上に押されたたった一人分の足跡。それをしんと積もる雪が消そうと必死に薄くしていく。

今なら言えるかもしれない。

必要なのはほんの少しの勇氣。

「あのさ」

しんしん。

雪が積もる音に私の言葉はかき消される。

「なに？」

「なんでもない」

「そか」

気づいてるくせに、言葉をはぐらかす。

彼のそういうところが嫌いだ。

しんしんと雪が降り積もる閑静な住宅街。足跡は付けたそばから消される。それでも歩みを止めない彼の足は必死に二人分の重さで雪を固めていった。

04 テブクロ（後書き）

突発的発足コーナー！

レンジファインダーNG集！その1

必要なのはほんの少しの勇気。

「あのさ、チャック開いてるよ」

しんしん。

雪が積もる音に私の言葉はかき消される。

「なに？」

「なんでもない」

「そか」

気づいてるくせに、言葉をはぐらかす。

彼のそういうところが嫌いだ。

しんしんと雪が降り積もる閑静な住宅街。足跡は付けたそばから消される。それでも歩みを止めない彼の足は必死に二人分の重さで雪を固めていった。

とゆうわけで『04 テブクロ』お送りして参りました。

テーマは『熱』です。

厚着していると以外と体温って伝わらなくね？ というお話です。

もうお気づきの方も多いと思いますが、この作品、章を追うことに、春夏秋冬と物語の舞台の季節が移り変わっていきます。次回はやつと春です。さあ二巡目だ！

05 ソヨカゼ

カレンダーを見る限り日中が夜より長くなつてはや一ヶ月。

最高気温がなんのかんのいつてもまだ肌寒かった数日前とは違い、やっと体感的にも暖かさというものを実感できるようになってきた。陽気と日光に当てられるにつれ街々の景色は彩度を増し、鼻に抜ける風の香りは春の訪れを感じさせる。

そう、季節は春。

昔こそ、春という季節にちようちよとかお花畑とかメルヘン極まりないイメージが先行しがちな純情少年だったが、春は馬鹿とか虫とか花粉症とか変態とかとか、なにかと湧くらしい季節として有名なのは言うまでもない周知事実らしいのは薄々感ずく年頃の俺今日この頃であるからして、もう少し心の準備が欲しかったかと問われればYESと即答できるほどにピュアボーイは捨てきれていなかったらしい。なにいつてんだ？ 俺。

と、脳内お花畑が倒錯気味に咲くほど、俺の隣歩くこの少女との出会いは衝撃的だった。

そう、この少女も変態さんとカテゴライズするのに申し分ない人種だった。

こいつ、いつ湧いたのか進級早々（少女にとっては入学早々）俺の周りに出没するようになって今では登下校を共にするようになった。今も何故か帰路につく俺の横をちよこちよこ付きまとってくる。まあ、そこまではいい……いや、よくないがいいとする。百歩譲って。

「ああ！ 何でだろう！」

だが、しかし！ 一言、一言でいいから言わせてくれ。

「女の子のエロトーク聴いてるのに相手がおまえだと全然興奮しねえ！」

つか、話す内容も妙だし。なんだこの虚無感。

「ガニ股で自転車のスタンドを立てる女の子萌へ」

「無視かよ！」

おまえ、いたいけな青年の純情を一つ壊してんだぞ！ わかってんのか？！

「あ、あと『3D』ってたまに『E口』って読んじやいませんか？」

「や、すいません。もうついていけません」

「私と思うに、3がEに見えるんですよ、Dはそのまま口に見えるちゃうんですよ」

「だから、ついていけないって」

「ほらEってローマ字読みでEって読むじゃないですか」

「聞いてないっす」

正確には聞いているのだが話の次元が常人からかけ離れていて理解できない。

「あ、そうだ、先輩」

「なんだ！？」

「そろそろ私たちが出会って二週間ですね？」

「ああ？ そうだっけ？」

もうそんなに付きまとわれてんのか、俺。

「だからお祝いに私」

言いながら俺の隣の少女は上目遣いに俺の顔を覗き込んでくる。

その頬はそういうメイクなのか若干上気したようにも見え、黒目がちな目も普段より湿り気を帯びている感じがする。

今しがたまで足の動きと間逆に振り子運動を繰り返していた両手も、なにかを恥らうようにスカートの端をいじいじとつまんでいる。少女が言葉をためらうように下唇を噛んだのとほぼ同時に目の前の信号が赤に変わった。

「今日、ノーパンなんです」

「はあ！？」

あやうく赤信号渡るところだったじゃねえか！ 殺す気か？！
「先輩、目が泳いでますよ？」

「うそつけ」二つ以上の意味で。

「あ、わかつちやいました？」

そうだろう、さすがにそんな変態さんが俺の周辺に居たら困る。そんな現実があるならサンタさんだって信じてやる。

「実は下着、全部着けてないんです」

言って、少女は腕組するように胸元を隠す。

「……………」

さすがに言葉を失う。

いや、この少女ならやりかねないのか？

いやいや、きつとうそだって、なあ？ サンタさん。うそだって言ってくれよ。

信号が青になると、少女はけろつとした態度で鼻歌まじりに歩き出す。

少女が軽快に歩を進めるにつれ疑惑のプリーツがゆらゆらと揺らめく。そして俺の心もゆらゆらと揺ら……

だー！

静まれ、俺の眼球。これ以上視線を落とすな。そうだ、顔を上げれば自然と視線もあがるはず。そうだそうだ上を向いて歩こう。ね、ほんとに、何故だかわかんないけど涙がこぼれそうだからさ……て、おい、網膜！ なにちゃっかり脳内に保存ちゃってんだよ、なに？ 太もも？ いや、違っただろ、それこそあいつの思い通り、というか本来の目標はそれより上にあるのであって決して……って、おい！ 俺！ しっかりしろ！

「なにいやってんですか？ 先輩」

「あ、いやこれはその……………」

どうやら脳内トリップしたまま五十メートルくらい進んでしまっていたらしい。焦点を合わせると振り向いた少女が心配そうな表情で佇んでいた。

「もしかして…………先輩？」

言いながら少女は目を細める。そのしぐさが少し幼さの抜けない

少女の容姿をそこはかとなく妖艶に魅せて、思わず目を逸らしてしまった。

「欲情しました？」

どことなく嬉しそうに声を弾ませる少女。

「まさか」たぶん。

「いらぬ劣情を催しました？」

「いいえ」断じて。

「そうですか……」

はあ、と、少女はため息を一つ。再び俺の横に並んで歩く。

少女の歩幅は俺よりかなり小さい。二週間前は意識して歩いていった記憶があるが、どうも自然に同じペースで歩けるようになったみたいだ。それは俺が遅くなったのか、少女が早くなったのか、あるいはどっちもか、分からないがそれだけ時間がたったという事実の痕跡を見ているようでなんと微妙な気分になる。

少し肩をすぼめて歩く少女。何を思っただけにつきまとうのか、予想ができないほど俺は馬鹿ではない。それでも、からかってるだけか？　そもそもなんで俺？　とか訝る俺は人としてどうなんだろうが。

だからこれから言うことは、つとめて冗談交じりに、

「ああの、さ」

しまった！　いきなりどもってしまった。

「なんです？」

吸い込まれそうなほどに澄んだ少女の瞳。その中に俺はどう映っているのだろうか。

決意の深呼吸を一つ。

よし！

と、そのときだった。肺のスペースを鑑みるに俺のせいだとは考え難いが、一概にそれが俺のせいだともいいきれないわけで、ここで人間が呼吸をすることによって大気が動くことがありえるのかとご高説っぽいものを脳内で垂れようとも思わないこともないのだが

俺の知識では不可能に近い所存なので割愛。

一言で言えば風が吹いた。それも結構強めな。

春の香りを孕んだ、ぬるく、湿ったようにまとわりつく風。秋や冬とは違い、揺れる木々は潤った葉の音を鳴らし、風の道を教えてくれる。

「きやつ」

声に振り向けば、風によってめくられたスカートを少女が必死に押さえ込んでいるところだった。

俺の視線に気づいた少女は、顔を真っ赤に染める。

「見ました？」

もうばつちりと。

「欲情……しました？」

あ？ するわけねーだろこのうそつき。

というか、恥ずかしいならそういう質問はするな、さつきより顔赤くなってるぞ。

あゝ、くそ、なぜか意思とは裏腹に頭に血が上る。

遺憾だが、おそらく赤くなっているであろう顔を見せないため、俺は先行し、少女からリードをとる。

「まあとりあえず……」

「な、なんですか？」

決意の出鼻をくじかれた落胆もそこそこに、手を頬に添えてみる。やはり、ひやりとして気持ちがいい。

まあ、とりあえず……いま少女に言っただけのことがある。それは二週間も俺に付きまとい続けてくれた感謝と報復をかねて。

つとめて無愛想に、なるべく無頓着に、肩越しに振り返って、一言だけ、

「3Dをなぜかエロと読んでしまうあなたは病気です」

05 ソヨカゼ（後書き）

突発的発足コーナー！ レンジファインダー・ハーツ恋愛相談室！
ここでは青春以上恋愛未満をテーマにお届けする『レンジファイン
ダー・ハーツ』にちなんだ空前絶後の恋愛相（以下略）

Q このあいだ好きなコに『好きだよ、愛してる』とギリギリ冗談
に聞こえるよう告白したところ『うわあ、うざ、てかキモ！』と返
されました。これって脈アリですかね？

A、そうですね、とりあえずあなたはドMだと思います。

ご無沙汰してます消炭です。

次回は春！ とか大見得きってしまったたくせに4ヶ月も間が開いて
しまいました。いやはや、お恥ずかしい限りです。

そして、待っていてくださった方（そんな奴いない？ 夢をみさせ
ておくれよ）お待たせしました！

そんなこんなでレンジファインダー・ハーツ『05 ソヨカゼ』テ
ーマはなんと『エロス』です！

どうでしょうかリビドーが迸ったでしょうか？

次回はもう少し早く投稿できればいいなと思っている所存でござい
ます。

それでは、今回は、空砲の大砲より実弾の拳銃ほうが強い。という
お話でした。

06 オモカゲ

異常な熱気に出現する厩気楼。なんてことはなく、それは俺の頭に流れる記憶のリフレイン。

そう気付いたところには教室には誰にもいなかった。

「うあゝ」

俺は頭を抱えて自分の机に転がる。うだる暑さに……ではなく。

俺の頭をよぎった厩気楼に。

「なにしてんの？」

頭を抱えた腕の隙間から見上げる。そいつは俺の隣に立っていた。見下す視線は高圧的、でもどこか面影がある。

いつのまに、なんて思わない。風を教室に通すために開け放たれたドアは人間などスルーだ。誰が入ってきてもおかしくない。それ以前に俺はクラスメイト全員が出て行ったのにすら気付かなかったのだから。

「落ち込み中」

素直に告白。そして自滅。二つ以上の意味で。

「馬鹿らし」

少女は俺の隣の机に腰をかけると足を組んで、わざとらしく顔と身を反らした。夏の日差しはまだ高い位置にあって、少女の影を短く落とす。

「誰のせいだと思ってやがる」

責任転嫁……というより八つ当たり、けれど、

「私の姉のせい」

「正解」

少女は見事当ててみせた。

俺は落ち込んだふりをして、どさつ、と、また机に突っ伏す。頭に上った熱に机の冷たい感触が気持ちいい。というか机ってこんなにすべすべだったんだな、俺の身を支えるその包容力、女性的なす

べすべの質感。シンプルかつ木目調というアクセントの効いたステレオではあるが堅実なデザイン。うお、すべすべ、やべー、このま机に惚れそうだ（もちろん恋愛感情的な意味で）。……はあ、このまま傷心も癒してくれないものかね。

「……」

しかし、どうも、居づらい　　というと語弊があるが、前門のエンジンジェルに後門のデビルというか（はい、笑うとこだよ君）右頬はこんなにも気持ちいいのに天井に晒した左側等部がやけに辛い、……いや重い？

怪訝に思っ、て、がばっ、と顔をあげて見ると、

「なんだよ」

どうりで重いわけだ。やつの視線が突き刺さっていたということか。

「別に」

しかも、目を合わせると、ぷいっ、そっぱを向かれた。まあ、今の俺にはどうでもいい。

そう思っ、て、また、どさっ、と俺は机にダイブする。

「……」

「……」

がばっ。

ぷいっ。

どさっ。

「……」

「……」

がばっ。

ぷいっ。

どさっ。

「……」

「……」

がばっ。

ぶいつ。

「あのね」

このままだと俺、頭上げたり机に打ちつけたりしてる変な人でしょうが。

「なに？」

その言葉は突き飛ばすように鋭い。

「さっきも言っただけ俺落ち込んでんの、だから一人にしてほしいわけ」

「だったらさっさと家にでも帰れば？」

少女はそっぽを向いたまま言う。

はあ、と俺の口から自然とため息が出た。

「お前な……」

少女の白い頬を見つめる。

はあ、何を言っても無駄そうだ。

どさっ。俺は再び夢の中へ傷心旅行へ

「……」

確認しなくても刺さってます視線。どうでもいいけど。

停滞した風は教室中の温度を上げて、空気中を漂う、多すぎる水分たちは汗の蒸発を妨げる、茹であがるような暑さも今は何故か心地いい。

ふと、頭が軽くなった感じがする。

それから、少女が重々しく唇を開く息使いが、静謐を張り詰める教室で、いやというほど分かった。

「やつぱり……私と居ると気まずい？ 姉貴にそっくりだから意識する？」

先ほどのような鋭さのない声は弱々しく、意識はしてないんだろぅが、トーンやイントネーションまでそっくりで俺の胸を打ちつける。

「……姉妹だからな」

どうとでも解釈できるように濁す。そして、突っ伏した机に強く

しがみつく。正直顔なんか見てられなかった。

うん、そうだ、やっぱり俺はお前しかないぜ、ああ、机LOVE！！ T・S・U・K・U・E、つ！ く！ え！

と、俺が無心に机に頬ずりしていると、

「つてえ！」

思いっきり頬をつねられた。そのまま上に引っ張られて、つられて立ち上がってしまう。

心の奥で嘆息しつつ、少女を冷めた目で見つめる。

というかまだいたんですか、俺と机のランデブーを邪魔しないでくださいよ。

俺は頬をつかんだまま離れない手を外そうと上から手を被せる。

少女は何故かそれに過剰に反応して体をよじった。そしてその反動で反対方向から手が飛んできた。

「いつてえ！」

頬をはいたいたのは平手かと思っただけだった。俺は不意打ちによろけて尻もちをつく。（尻が）けっこう痛い。

俺は抗議を込めて少女を睨みつける。

少しはひるむかと思っただけ少女は逆に鬼の形相でにらみ返してきた。

「馬鹿らし、みっともない！ たかだかふられたくらいで！」

少女のどなり声は廊下にまで響く。やけに長い反響かと思っただけ、俺の脳が勝手にリフレインしてただけだった。

「なっ！」

我に返り、あわてて少女と間合いを詰める。とつさに反応した少女の腕を使い口を塞ぐ。そして睨む。さっきの百倍は怖い顔してると思う。

「お、大声で言うんじゃないねー」

無声音で警告を発する。しかし、まったく効果はなかったようで、少女はもがいて、口にあてがわれている俺の手からのがれると、ぷはっ、と息をつき、また大声で怒鳴った。

「ど、どうせ、最後の夏休みに、え、えエロいことでもしようと思っただけでしょ！」

「お前な」

今度は、引かねーぞ。

俺は再び間合いを詰め、少女の手をねじり、口を塞ぎにかか

「ぐほお」

俺のみぞおちに少女の華麗なローブローが決まった。

一瞬で肺から空気が抜けて、息が吸えなくなる。酸素が供給できなくなると分かった心臓はより一層、早鐘を打ち鳴らして、俺は地面にひれ伏すしかなかった。

腹を押さえうずくまる俺を見下ろすこと三秒、少女は、ぷいつ、と顔を背ける。

「あ、のな、けっこう、げほ、シャレになんないぞこれ」

呼吸はできないが、ひねり出すように真っ白な左頬に向かって一言。

「あたりまえでしょ？ 私は空手部主将」

「そうでした……」

俺はがつくりと地面に頭を打ち付ける。

ずいぶん呼吸が楽になってきた。

そして、俺は少女を見上げる。なんか俺たちの構図が女王様とその下僕って感じがする。

改めて見る少女の横顔はやっぱり似ていた。でも似ているだけで本人じゃってわけじゃないことを今のローブローで思い知った。それでも俺は情けないことだが少女の横顔に幽霊を見てしまう。そいつは俺の顔をしていて笑いかけてくる、そして俺の肩を叩いて教えてくれる。青春の甘酸っぱさとか人生の厳しさとか恋の偉大さとか。ん？

そういえば、なんか、違う気がする。

少女の横顔を記憶と照合、あ。

「そっいえばお前、髪、切ったよな？」

少女の首が勢いよく回って俺に向き直る。表情の変化も勢いよく、そして変だ。口元はにやけているのを必死で隠すみたいに歪んで、目と眉は鬼と見まごうほどにつりあがっている。

「は？ なに、今頃気づいたの？」

怒っているのか笑っているのかいまいち判断しかねたが、声が今までにないほど優しかったのでたぶん怒っているということだろう。ここはこれ以上は触れぬが吉だ。

しかし、ちゃんと見れば少女は結構な長さの髪を切ったことが分かる。活発な少女にはボーイッシュな髪形も似合ってるが……個人的には前のほうがよかったかな。

「あんたは前のほうがよかったでしょ、姉貴に似てて」

髪の毛を梳きながら、少女はぞんざいに言う。

「お前はエスパーか」

「やっぱり……」

言って、少女は俯き、

「だから嫌だったの」

消え入りそうな声で、たぶん、そう言った。

「何が？」

「なんでもない！」

「ぐはっ」

またローブローか！

あれ？ でも今度は痛くないぞ？

腹から視線を上げると少女の姿はもういなかった。

「こっち！」

声がかかったのは扉のほうから、視線を追いつかせると少女がドアに手を掛け、仁王立ちしていた。

その目はかつてないほど真摯に輝き俺を見つめる。

その瞳の中に一瞬先の未来を想像して、鼓動を高鳴らせてしまう。少女はめいっぱいに息を飲む。そして、二回瞬き、そして口を開く。

「ベー！」

舌先をめいいつぱい出して、器用に効果音を発しながら。そして自慢げな微笑みを浮かべると、走りさっていった。

「なんだかな」

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、その微笑みの裏の幽霊が消えて見えた。

面影のないその笑みは、たしかに俺の知らない表情だった。

06 オモカゲ（後書き）

告白します！ 今回の話、構図が『01 ウタタネ』に似てますね、そんなこんなで自分の引き出しの狭さに落胆しつつ『06 オモカゲ』です。

テーマは『失恋』と直球で内角を攻めてゆく姿勢は崩しません。構図のことは書いてる途中で気付きましたが、「男女逆だしいつかとニート根性丸出しでお送りしました。」

『06 オモカゲ』ちょっと（いや、だいぶ？）分かりづらい話だと思いますが、二回くらい読んでやってくださいm（――）m
机が大好きというお話ではありませんよ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4160m/>

レンジファインダー・ハーツ

2011年1月25日00時25分発行